

1 上代の文学 《概観》・神話と伝説

○作品の下の年は、成立年を示す。

時代	700	大和600時代
【口承文学】	<ul style="list-style-type: none"> * 大和朝廷の統一 (四世紀ころ) * 漢字の伝来 (五世紀ころ) * 仏教の伝来 (五三八) 	<ul style="list-style-type: none"> * 遣唐使の初め (六三〇) * 大化の改新 (六四五)
【記載文学】(飛鳥文化)	<ul style="list-style-type: none"> * 平城京遷都 (七一〇) 	<ul style="list-style-type: none"> * 大化の改新 (六四五)
【古事記】(太安万侶)	(七一一)	
【日本書紀】(舍人親王ら)	(七二〇)	
【出雲国風土記】	(七三三)	
【天平文化】		
【万葉集】	(七五九?)	
【懷風藻】	(七五一)	
【歌經 標式】(藤原浜成)	(七七二)	
【高橋氏文】	(七八九)	
* 平安京遷都	(七九四)	

【問題】 次の文章の空欄①～⑤に、後の語群の中から最も適する語句を選び符号で記入せよ。

文学の発生から平安京遷都(七九四)までを上代という。

【口承文学】 古代においては自然の本体と考えられた神との交渉は人々にとって最も重要なことだった。その神への祈りや祖先の功績を語る

「語り」やさまざまな霊魂への思いである「うた」は、①により

継承されたが、これらを口承文学という。神話・伝説・②・祝詞

はこのような古代の口承文学の貴重な遺産である。

【記載文学】 六世紀ごろに漢字が使用されるようになると、それまでの口承文学は文字で記載されるようになる。中国や朝鮮への対抗意識もあ

つて、それらは国家的な規模で行われ、③・『日本書紀』や

④などの歴史書・地誌が作られた。

外からの刺激は従来の集団文学を変質させ、個人の文学意識を育て

た。文学では⑤が最も優れたものとされ、宮廷を中心に盛んに作

られて『懷風藻』にまとめられた。『万葉集』の編さんも中国の漢詩

集などの刺激によるものと思われるが、この大歌集は日本人の感受性

の原点を記して上代文学の記念になっている。

- 【語群】
- ア 和歌
 - イ 漢詩文
 - ウ 歌謡
 - エ 歌手
 - オ 語部
 - カ 『古事記』
 - キ 『風土記』
 - ク 『将門記』

【問題】 次の問いに答えよ。

1 a 元明天皇の命により和銅五年(七二二)に完成したわが国最初の史書は何か。

b 壬申の乱に勝利した天武天皇の命でこの史書の内容を誦習していた人はだれか。

c その人が誦習していたものを、選り記録したのはだれか。

2 a 元正天皇の命で養老四年(七二〇)に成立した、六国史の最初にあたる史書は何か。

b 天武天皇の皇子でこの史書を作った中心人物はだれか。

3 和銅六年(七一一)の朝廷の命で、諸国から地名の由来や物産などを報告した文書は何か。

4 奈良時代末期、ある氏族がその家の伝承を記して朝廷に提出した書は何か。

5 言霊信仰に基づいて神に奏する祈願・祝福の言葉を何と

いうか。即位・改元など国家の大事のときに天皇が臣下に告げる言葉を何と

いうか。古代に活躍した偉大な祖先たちの姿を、英雄の物語としてとらえたものを何と

●口承文学
氏族の専門的な伝承者である語部によって語り継がれ歌い継がれてきた、基本的に文字によらない伝承。

神話・伝説・歌謡・祝詞などがある。

●神話・伝説・説話

神話＝自然界の出来事を神々のはたらきとして説明しようとした語り伝え。

伝説＝自然を克服して自分たちの生きる場を切り開いてくれた祖先たちの姿を英雄の物語としてとらえたもの。

説話＝身の回りのあらゆることを興味深くまとめた話。

●六国史

- ①『日本書紀』(七二〇)
- ②『続日本紀』(七九七)
- ③『日本後紀』(八四〇)
- ④『続日本後紀』(八六九)
- ⑤『日本元徳天皇実録』(八七九)
- ⑥『日本三代実録』(九〇一)

官撰の国の正式の歴史書。六編をつなげると神代から平安初期までの一貫した古代史になる。いづれも漢文で書いてある。

●言霊信仰

よい言葉・美しい言葉は幸せをもたらす、悪い言葉は不幸をもたらすという、言葉の霊力についての信仰。

●氏族の伝承記録

- ①『高橋氏文』…延暦八年(七八九)に高橋氏が同僚の安曇氏と神事に奉仕する席次を争ったとき、自氏の正統性を主張して朝廷に出した書。
- ②『古語拾遺』…大同二年(八〇七)成立。齋部氏が自氏に伝わる古伝説を記して中臣氏と対等であることを主張するために上奏した書。

表記	内容	目的	時代	成立	編者
漢字の音訓を交えた変則の漢文	神話・伝説・説話などを多く含み、文学的要素が強い	国内的に皇室中心の国家統一を説く	神代―推古天皇	和銅五年(七二二)	稗田阿礼が誦習し、太安万侶が撰録
漢字の音訓を交えた変則の漢文	漢字の音訓を交えた変則の漢文	表記も文体も純粹の漢文	神代―持統天皇	養老四年(七二〇)	舍人親王

1 『古事記』と『日本書紀』

2 『風土記』
和銅六年(七一一)の朝廷の命により、諸国より差し出された地誌。完全な形で残るのは『出雲国風土記』のみ。他に常陸・播磨・豊後・肥前がある。

3 祝詞・宣命

①祝詞＝神に奏する祈願・祝福の言葉

②宣命＝天皇が臣下に告げる言葉

2 上代の詩歌

1 上代歌謡
 集団的な生活を基盤に、神祭りや労働のときに歌われた上代の「うた」。『古事記』『日本書紀』『風土記』『万葉集』などに約三百首残されている。

この上代歌謡は、平安時代の「神楽歌」や「催馬楽」などの源流であり、一方、歌体や技巧は後の和歌の母胎にもなっている。

2 上代歌謡の歌体

片歌 かたうた	五七七（最短の歌）
旋頭歌 せんとうた	五七七五七七（片歌二回）
長歌 ちやうか	五七……五七七（長い形式）
短歌 たんか	五七五七七（標準的な歌体）
仏足石歌 ぶつあししうた	五七五七七七（特殊な歌）

3 「万葉集」

編者最終的には大伴家持か
 成立 七五九？

構成 全二十巻。総歌数、約四千五百首。

基本的には、①雑歌②相聞③挽歌④の三大部立

①現存最古の歌集

②表記は「万葉がな」による
 ③「東歌」「防人歌」「人歌」を含む

4 「万葉集」の時代区分

時期	時代	特色	代表歌人
一期	壬申の乱 (六七二)	集団的歌謡から個人的な和歌へ	舒明天皇 有間皇子 額田王
二期	平城遷都 (七二〇)	表現形式の整備 長歌の完成	柿本人麻呂 高市黒人
三期	天平五年 (七三三)	個人的な歌人が多く出てくる	山部赤人 大伴旅人 山上憶良 高橋虫麻呂
四期	天平宝字三年 (七五五)	歌の類型化 感傷的歌風	大伴家持 笠女郎

5 「懷風藻」(漢詩集)

編者 未詳

成立 天平勝宝三年(七五二)

構成 六十四人の作品約百二十編を作者別に収録

代表詩人 大友皇子、大津皇子、藤原宇合、阿倍仲麻呂

問題 次の問いに答えよ。

1 a 和歌の母胎にもなった、上代に歌われた「うた」を総称して何と呼ぶか。

b それらの「うた」のうち、『古事記』と『日本書紀』に載っているものを特に何と呼ぶか。

2 a 「うた」のうち、五七七の三句からなる最短の形式のものを何と呼ぶか。

b 前問の形を二回くりかえしたもので、その多くは問答形式になっている歌を何と呼ぶか。

c 五七の句をくりかえし最後に五七七を加える形式の歌を何と呼ぶか。

d 五七五七七という、後に最も主流になる形式の歌を何と呼ぶか。

e 奈良薬師寺に現存する、釈迦の足跡を刻んだ石碑に記された歌を何と呼ぶか。

3 a 八世紀後半に仁徳天皇期以来約四百五十年に及ぶ歌を集めた、現存最古の歌集は何か。

b この歌集を最終的に現在の二十巻の形に編集したと思われる有力な人物はだれか。

c この歌集にはおよそ何首の歌が収められているか。

d この歌集の原本は漢字の音訓を巧みに用いて表記されているが、その表記法を何と呼ぶか。

e この歌集で、天智・天武の両天皇に愛されたことで有名な第一期の代表的な女流歌人はだれか。

f 同じく第二期の持統・文武二帝に仕えた宮廷の専門歌人で、長歌の完成者はだれか。

g 同じく第三期の歌人で、高市黒人のあとを受け叙景歌の完成者とされるのはだれか。

h 同じく第三期の歌人で、「酒と旅の歌人」として有名なのはだれか。

i 同じく第三期の歌人で、この歌集中唯一の思想歌人であり「貧窮問答歌」で有名なのはだれか。

j 同じく第三期の歌人で、伝説を素材に独自の長歌を歌いあげたのはだれか。

k 卷十四に約二百四十首載っている、東国地方の民謡的な歌を何と呼ぶか。

l 卷二十に主にみられる、辺境防備のため九州へ召集された東国の農民たちの歌を何と呼ぶか。

4 天平勝宝三年(七五二)成立の、現存する最古の漢詩集は何か。

●記紀歌謡
 『古事記』に約百十首、『日本書紀』に約百三十首、重複しているものを除くと実数は約百九十首である。

1 仏足石歌碑

天平勝宝五年(七五三)、文室真人智努が亡くなった母の追善のため釈迦の足跡を石に刻んで建てた石碑。これに仏足石をたたえる歌二十一首が刻まれており、薬師寺境内に現存する。

2 「万葉集」の歌数

約四千五百首のうち、
 短歌 約四千二百首
 長歌 約二百六十首
 旋頭歌 約六十首
 仏足石歌 一首

3 雑歌

『万葉集』の公的な歌を指し、相聞・挽歌を除く、行幸・旅・宴会などの歌を含む。千五百五十首ほど。

4 相聞

本来は互いに問いかかわす歌だが、恋愛の歌が多い。千七百首あまり。

5 挽歌

棺を挽くときの歌の意で、人の死に関する歌。二百首あまり。

6 万葉がな

漢字によって日本語を表記するために、漢字本来の意味を離れ、字音や字訓を借用した表記法。記紀にも使われていたが、『万葉集』において用法が発達したので「万葉がな」と呼ばれる。

7 東歌

東国地方の民衆の生活をうたった民謡的な歌。卷十四に約二百四十首。

8 防人歌

唐や新羅に対する辺境防備のため九州に召集された東国の農民たちの歌。卷十四に五首、卷二十に約九十首。